

# 純理經濟學の批評

手塚壽郎

此一編は Bousquet, Critique de l'économie pure, dans la Revue d'économie politique, septembre-octobre, 1926. を譯出したものである。從來佛語にて Economie pure とは數學派經濟學を指すのが例であるが、(Voir Antonelli, Principes d'économie pure, p. 3.) プースケイの云ふ此純理經濟學は此數學派の經濟學と奧太利科學派——メンガーよりワイセルに續く——の經濟學とを包括せるものである。プースケイは、ランドリー教授學界を去つて沈滞の極に達してゐた佛蘭西の理論經濟學界に彗星の如く突如として現れて來た新進である。リビエール君の談を信ずれば氏はローザンヌのパレト家に寄宿して研究に従つたと云ふ。リビエール君の此話は恐らく眞であらうと思はれる。なぜならプースケイ自ら Précis de sociologie d'après Vilfredo Pareto の序文に於て、それがパレトとの了解の下に物せられた事實を物語つてゐるからである。而してプースケイはパレトと協力してパレトの大著「社會學」の要約を企てたほど、又「社會主義のシステム」の第二版の出版を奔走し且つそれに透徹せる序説を加へてパレトの思想の内面的發達を論じたほど、更に又 Revue d'histoire économique et sociale, 1923, nos. 2—3. にパレトの學説を記述評論したほど、パレトを理解してゐる。彼の理解はパレトの社會學のみに止らない、パレトの數學的經濟學に就ても同様である。それは彼が公にした幾つかの著作によく現れてゐる。彼はもとく政治學校の出身であるから、オーブチヤコルツン

教授の影響を受けたるべく、數學派の經濟學に充分なる興味をもち得たるべきは疑を容れない。彼が伊太利の經濟學者、就中 Senisini を引き、Amoroso を引き、De Pietri-Tonelli を語り、Murray を述べ、波蘭土のザロツキと交渉せる跡あるのを見て、如何に彼がローザンヌ學派に興味を有するかと解る。氏の如く充分に數學派を理解せる者の批評は數學を經濟學に應用せんとする我らにとつて、考究の目標たり得べきである。從來幾多の批難が數學派經濟學に加へられたが、一として數學派、少くとも其發展の最高階段にあるローザンヌ學派を理解した上での批評は無かつた。バンルベの如き世界有数の數學者が數學派經濟學に加へた批評に於て尙然りである。(Voir Boven, Les applications mathématiques à l'économie politique, pp. 198—199) 今譯者はブースケー氏の如き人あるを知つて大いに喜びつゝある者である。氏の批評の示す所によると、氏の傾向は經濟動學に面接して數學派の無力を認め、シユンペーターのあとを追ひ、シユンペーターの先に出てんとするにあるらしい。氏の「純理經濟學講義」が目下リビエール書店の手に印刷中である。譯者は絶大の興味を以て、新著の出づる日を俟つてゐる。序でに云ふ、氏は最近 *Essai sur l'évolution des pensées économiques* と題する一書を著し、學としての經濟學の發展を論じ、來るべき經濟學の傾向を暗示してゐる。其結論はこゝに譯出する純理經濟學の批評と其趣旨を同うする。

余はローザンヌ學派に屬する者ではないが、ワルラス—バレットの業績に對しては多大の讚美を惜まざる者であり、同時に埃太利學派の業績に對しても等しく多大の讚美をなす者である。此稿に於て余が批評の標的となさんとするは此ら二つの學派の純理經濟學である。余の此批評は既に公にせる余の研究の結論とも云はるべきものである。(註) それ故當面の批評を展開するに先ち極めて簡單にそれらの研究の結果を約述し置くが便利である。

(註) Bousquet, Les nouvelles tendances de l'école autrichienne, Revue d'économie politique, septembre-octobre, 1924.

數學派の經濟學者自ら云つてゐる所によると、(註) 數學派の展開は多大の障礙に衝突して行き詰り、其發展は間もなく全く阻止せらるゝに至るべきが如くである。即ち一方に於て經濟理論上の或事實を數字を以て正確に表すべき方程式は餘りに複雑になつて來るし、他方に於て數學は動態の研究從て實在の研究に對しては全く無力である。故に動態經濟、實在の經濟に就て何ら新しい理論を數學派の經濟學より期待することが出來なくなつた。

(註) Bousquet, Pareto, le développement et la signification historique de son oeuvre, Revue d'histoire économique, 1924, no. 2.

然らば奧太利學派はローザンヌ學派の與へ得ないものを與へ得るであらうか。現在の所では奧太利學派も又其展開に於ける演繹の歩みを止め、(註) メンガーが閉ぢ込めてくれた限界のそとにすることが出來ないでゐる。

(註) Bousquet, Les nouvelles tendances de l'école autrichienne, Revue d'économie politique, septembre-octobre, 1924.

以上が余のかつて公にせるものゝ要旨である。然らば此純理經濟學の價值如何。將來の經濟學は此純理經濟學に頼らなくて濟むであらうか。余はかくは思はない。なぜなら學としての經濟學は此純理經濟學に依つて打ち建てられたのであるからである。混血種に過ぎなかつた經濟學 *Economie*

politique が知識の爲めの知識となつて科學の一分科となつたのは此純理經濟學の功績によるのである。純理經濟學の論理的構造と數學及び力學の論理的構造とは其間に何らの相異がない。のみならずマツハやポアンカレやデュエム(註)が科學の基礎として物理學に見出せるものは、其まゝ總て純理經濟學のうちにも見出される。

(註—譯者) デュエム Duhem はボルドー大學教授たりし人で近代の佛蘭西に於てポアンカレと並んで最も偉大なりし物理學者の一人である。教授の科學の方法論は *La théorie Physique*, 1906, 2e éd, 1914. に展開せられるが、純理經濟學を學ぶ者の忘れ得べからざる著作である。譯者は他日何らかの機會に於て詳しく彼の方法論を研究し、且つ其評論を試みて見たいと思ふ。尙彼の略傳、物理學特に熱力學上の貢獻及び科學史及び科學方法論の概略に就ては、*Qu'est-ce que la science?*, Paris, 1926. 中の O. Manville の論文 *La réponse de Pierre Duhem.* を参照せられたい。

要するに純理經濟學は行詰つてゐるのである。純理經濟學は過去のものである。だが我らは將來の理論經濟學の建設に之を利用せねばならぬ。故に過去に屬する此理論を批評するによりて、其うちから我らは新しい理論經濟學が受け入れねばならぬ幾つかの原理を導き出し得ないか否かを本論の目的と思ふ。間接には余の問題はワルラス、バレットとメンガーとが如何なる程度に於て新なる經濟學——彼らの思想より出發し、且つ彼らによりて既に建てられたシステムの上に立てらるべき——の發展に資し得るかを見るを目的とする。

然し此研究を始むるに先ち、シユンペーターを忘るべからざることを附記せねばならぬ。余は先にシユンペーターの「經濟發展の理論」を賞揚したが、實にシユンペーターは將來の經濟學のクルノーと考へらるべきであらう。而して此新なるクルノーは數學派の開祖の如き誤を犯してゐないクルノーであらう。だが此新しいクルノーを特種の問題しか取扱つてゐないと云ふ批難を免れ難い。

—

將來の經濟學の第一原理は、此經濟學は具體的實在の合理的論理的組織化を唯一の目的とする科學的のものでなければならぬと云ふことである。來るべき理論經濟學は物理學、化學、工學の理論と同じく、實踐的規範の意味をもつてはならない。此點に就て新しい理論經濟學は純理經濟學の態度を學ばねばならぬ。經濟學說史上かゝる科學的態度が現れたのは近代のことに屬する。十八世紀に於ては Richard Cantillon ひとり客觀的理論を作りあげんとした。(註一)次いで科學的經濟學を礎き上げんとした者は古典學派の殿をなしたる Chevalier である。(註二)だが此ら二つの試みは何れも孤立せる試であつて、同じ時代に他にかゝる企を敢てしたものはない。然るに奧太利學派は初めて一學派を形作りて純然たる科學的立場に立ち且つ、此立場を維持してゐたのである。ワルラスが

經濟均衡の方法に依りて世界の平和を夢想してゐる間に、(註三)メンガーは科學的經濟書の第一たる「原理」を綴つたのである。後バレット出て、ローザンヌ學派は科學的なる點に於て奧太利學派に比敵し得るようになった。二學派共に他の科學に於て用ひられつゝある *Approximations successives* の方法を用ひる。此方法こそ將來の經濟學の方法であらねばならぬ。

(註一) R. Cantillon, *Essai sur la nature du commerce en général*, London, 1755. (譯者註) 此著者に就ては「商業と經濟」に伊藤久秋教授の詳細なる研究がある。教授は、Legrand, Richard Cantillon, 1900, Paris. に據られたものである。余は Cantillon がケネーに與へたるべき影響に就て教授の見解に服することが出来ない。又教授は、Cantillon がランドリー代議士の所謂「需要」の方向が生産及び人口に及ぼす影響」の思想を通じて當時の學者及び後世の學者へ與へたるべき影響を輕視せらるゝのに賛意し難い。此問題はランドリー代議士に依りて詳しく論ぜられた所であるが、余の見る所によればランドリー代議士の記述に對してはアリックス教授のなした補充のほか尙多少の補充を要すべきものがあるようである。此らの問題に就ては余は他日を期して詳論を試みて見たいと思ふ。殊に Cantillon の「需要の方向が生産及び人口に及ぼす影響」論が近代の Otto Effertz に及ぼしたるべき——少くとも兩者に類似點がある——影響は注目し値する。なほなら Effertz 無かりせば Landry, *L' utilité sociale de la propriété individuelle* も無かつたべし、Pigou, *Economics of Welfare* も無かつたべし、Loria, *I fondamenti scientifici della riforma economica*, 1922 も無かつたべしからである。

(註二) Cherbuliez, *Précis de la science économique*, 2vol, 1862. (譯者註) Cherbuliez はスイス人であつた。今如何に彼が傑れた學者であつたかを示す爲めに、Bousquet, *Essai sur l' évolution des pensées économiques*, p. III et suiv. より若干の引用を試みる。「敢て Cairnes の著作を要しない。……我らは科學的なる點に於て眞の傑作を有する。それは Cherbuliez の *Précis de*

la science économique et de ses principales applications である。余の經濟學說研究の態度を以てする以上、余はコッサにも増して Cherbuliez がミルに優れる事實を信ずる。彼は獨創家て——序文に云つてゐるように——同時代人の説と異つた説を屢々吐いてゐるが、然し彼の貢献は古典派の領域を出てない。然し經濟學を科學として樹立せんとする主觀的態度に於ては時勢に四十年を先てる大學者である。彼の序文は全文引用に値する。彼の序文は滅び行く古典派が科學の何ものたるかを解するに至つた事實を證明する。

「經濟學が科學に非ずして術であると云ふ思想は Cherbuliez の眼には無稽の事である。『科學的思辨の目的と限界とに就てのかゝる該解ほど分析の精神に反し、從て總ての科學の進歩に反するものは何ものもない。』そして經濟學を政治の術の一分科と定義せるシスモンダに皮肉に答へて彼は云ふ『もし然りとしたら、物理學や化學も政治の爲めに應用せらるゝことがあるのであるから、此らの物理學や化學も政治の術の一分科でなければなるまい』と。總ての科學に於てと同じように、經濟學も其對象を限定せればならぬが、此問題に就て彼が次の如く云ふとき、我らはバレットの言を聞くような感じがする。『科學の進歩の傾向は常に益々科學を分化せしめ、決して此らを混同せしめない。各科學の研究の領域を益々分割せしめ、同一人の手で同じ一畑を耕すが如きことをなさしめない。此三世紀以來物理學其他の自然科學がなせる大進歩は用ひた方法のよいのにも因るのであるが、科學の分野の分割に因ることも甚だ多い。』かくて經濟學は法學及び道德學より區別せられねばならぬ。此ら法學及び道德學は『互に大なる影響を及ぼし合ふ現象を取扱ふのであるが、然し眞理の爲に經濟現象を此ら道德及び法律現象より分離し、獨立なる科學の對象となすことが可能であり、且つ煩る便利である。』

(註三一譯者) ヲルラスの純理經濟學要論は其客觀的内容に於て傑れたものであるが、學の爲め學としての知識ではなく、社會改良の方法を考ふべき一階梯としてのみ説かれてゐるのである。ヲルラスの處女作は譯者の記憶に誤なしとすれば、ブルードンの所有權及び正義論の批評であり、以後社會問題が彼の念頭を去らない。

要するに主觀的局面(註)に於ては純理經濟學は完全の域に達したのであるから、我らは此態度を採り、正義や社會的理想や實踐的修正や國家、市民に對する忠告や、自由や連帶主義を論ずることなく、他の科學と同じ典型の科學を築かねばならぬ。これが將來の經濟學の第一の原理である。

(註―譯者) こゝに云ふ主觀的局面とはバレットが「社會主義の組織」に於て用ひ、それをブラスケーが用ゐてゐる意味に於てゐる。詳しくはブラスケー著經濟思想發展史論序文參照。

此第一原理は將來の理論經濟學の素畫を書いてゐるものではない。此第一原理は經濟學の内容や問題に就て何ものも示してゐるのではない。將來の理論家がつべき精神状態を示すのみである。此精神の向けらるべき材料を示すのではない。此材料の必要なることは云ふを待たない。殊に純理經濟學は久しくめざましい産物を出してゐないからである。(但しバレットとシエンペーターを例外とし)尤も純理經濟學が實在から益々離れて何ら積極的産物を出し得ないでゐるのと併んで、特種の問題に就ての有益なる研究が少くないのであるが、此ら兩方面の研究を結ぶべき繩帶がない。そこでバレット、グイゼルの如き純理經濟學者は活路を社會學的經濟學に求めむとし、又同じバレット及び De Pietri-Tonelli(註)の如きは統計によりて純理經濟學の内容を與へんとしてゐる。純理經濟學の運命は窮はつたのであらうか。余はかくは思はない。從來の純理經濟學の得たる結果を客觀的に批



評しつゝ進み行くなれば其前途は尙洋々としてゐる。

(註—譯者) Alfonso de Pietri-Tonelli (パドヴァ大學教授)の原著の第三版に據れりと云ふ佛譯 *Traité d'économie rationnelle*, 1927. には原著の最大の特徴たる統計に依りての純理の證明が全然省かれてゐる。譯者が机上に有する原著は *Lezioni di scienza economica razionale e sperimentale*, Ravigo, (IId edizione.) であるが、其書中到る所に統計的實驗的證明がある。原著者が第三版に於て此部分を削除したのであるか、又は佛譯者が譯出に當りて削除したのであるか、余は今之を直ちに調査することが出来ぬ。只 De Pietri-Tonelli 教授の理論經濟學の方向を知らんとする者にとりては、統計上の證明を省いた佛譯は物足りぬ感じを與へる。

次に將來の理論經濟學の礎石をなすものは均衡の原理である。此觀點に立ちて純理經濟學を評するならば、先づ奧太利學派は峻烈な批評を受けねばならぬ。奧太利學派は此原理を發見しなかつたのみならず、組織的に之を捨てゝゐる。奧太利學派とローザンヌ學派との背離はこゝに明である。奧太利學派は相關的依存關係 *La dépendance mutuelle* を考へなう。「知覺の世界の一切の物は原因結果の法則に従ふ」とメンガーは云つたが、奧太利學派は此思想を金科玉條としてゐる。だが此思想は物理學に於ても生物學に於ても誤であり、社會科學に於ては勿論誤である。之に反し偉大なるワルラスは均衡の問題に就て、後に彼の弟子らが敬虔に且つ數學的に展開したる正確な概念を残したのである。

敬虔に且つ數學的にの二語はローザンヌ學派の解したる均衡の原理に就ての余の批評の態度を含み表したものである。バレットは科學的態度に於てワルラスを抜くこと幾何なるかを知らぬ。彼は數學に秀でてゐたし、理論上の貢獻は甚だ多い。然し經濟純理論の立場に於ては彼はワルラスの直系の弟子である。ワルラスはバレット(純理經濟學上の貢獻の點から見ると二人は分ち考へらるべきではない)は彼ら自ら爲せる所のものゝ限界を解しなかつた。ワルラスは形容上學に陥り、バレットはワルラスが残したものを一方向にしか用うることが出来なかつた。此ら二人に對するかゝる評言は、彼らが偉大なる學者であるのであるから、充分な證據なくんば發せられ得べきものではない。此證據を擧ぐるに先ち、將來の理論經濟學は一層密接に數學的均衡論に結び付かねばならぬと余は繰り返して云ふ。

均衡論者に對する非數學派の批評は全然意味をなしてゐない。我らは先づ此事實を認めねばならぬ。然し文學派經濟學者 *Les économistes littéraires* (非數學派を指す) 批評にも辯解の辭はある。なぜならローザンヌ學派は經濟理論とは方程式と數學記號で手品を使ふにあるかの如くに見せかけることが屢々であるからである。實はローザンヌ學派は數學が一方便であるに過ぎないことを主張すべきであり、就中之を證明すべきであつた。然るに彼らは數學を目的として仕舞つた。例へばバレ

トが集産主義の制度下に於ける均衡を論じた場合の如きがある。思辨の親點からは面白い。然し經濟學の觀點からはかゝる演繹は何の役にも立たぬ。ローザンヌ學派は數學的經濟學と經濟學的數學を混同せるものである。前者は理論經濟學の一部に過ぎない。後者は別なものである。數學派に此根本的誤謬ありしが故に、均衡の概念に就いても誤れる結果が生じてゐる。

即ち數學派經濟學にとりては均衡は純粹靜態即ち交換、生産、資本化等が其システムは内在的な要因の結果たる變化を受けない状態である。我らはワルラスの方程式によりて、他の事情を不變と假定すれば如何なるメカニズムの影響によりて均衡状態が得られるかを知ることが出来る。之に對しては純粹論理的理論としては批難すべき何もものもない。經濟理論としても均衡の思想は古典派の明にし得なかつた或現象の性質を明にした功績がある。蓋し數學に依りてのみ相關的依存關係を正確に表現することが出来るからである。だがそれだけが數學派の功績である。此ほかにはローザンヌ學派が導き入れた數學記號によりて發見された何もものもない。事實に關して數學派は少くとも直接には何物も教へてゐない。シミアン教授は云ふ、均衡の方程式は具體的現象を複雑にしたものに過ぎぬと。至言である。此均衡の數理論に於ては未知の事項の數に等しい方程式を見出さねばならぬ。所謂ローザンヌ學派は方程式と條件とを算へて其方程式成立の可能を説く。(註)經濟學上の

知識としては、此成立が可能であつても *humbug* に過ぎない。何となれば第一に均衡論者は自由に條件を變へて欲する結果を得ることが出来るからであるし、第二に既述の意味に於ける均衡に達すべき條件と方程式とが等しくなくとも、其不完全なシステムのみが具體的經濟均衡の概念を得るに足るからである。具體的經濟均衡は靜態ではない、又決して靜態たり得ない。それもローザンヌ學派が經驗に訴へたと云はねばまだしもであるが。

(註) Pareto, *Cours d'économie politique*, §§ 52, 60, 100, etc.; Murray, *Lecons d'économie politique*, trad. franc., p. 127 et suiv.; Di Pietri-Tonelli, *Lezione di scienza economica razionale e sperimentale*, 2e ed., p. 321.

自ら經驗に據つたと云ふローザンヌ派の主張は不正確である。パレトの理論は客觀的であり、論理的であり、合理的であつて經驗的には證明されたものではない。余がかつて云つたように「均衡の方程式は實在の象徴であるとは誰も云はぬであらうし、又古い説は此象徴たる性質をもつてゐるなど、は誰しも云ふまい。蓋し均衡の方程式は此らの古い理論の誤りを明に證明したからである。かくて將來の經濟學はローザンヌ學派の均衡の概念の總てをとることなく、その或るもののみを採らねばならぬ。第一にローザンヌ學派は原因結果の關係に代へて相關的依存關係のあることを教へてくれた。經濟問題は常に相關的依存關係の問題である。古典派は此關係の存在を知らず、現代の

經濟學者中の傑れた人も之を知らない。此觀點を立場としてローザンヌ學派が他に加へた批評は甚だ有力なものである。(註)今一例だけを挙げれば價格の原因に就いての論争はローザンヌ學派の相関々係論によりて終結を告げた。かゝる論争は此學派の出現によりて全然無意義となつた。カントが因果律を範疇の一としたほど、因果關係は自明であるが如くである。然し今やかような見方をなし得なくなつた。物理學に於ても化學に於ても因果なる概念に均衡なる概念が代つてゐる。此思想は先づワルラスによりて經濟學に導き入れられ、バレットによりて社會學に導き入れられた。時間と空間の範疇は永久に常に許されねばならぬであらうが、因果關係の範疇はなくなり得るのである。そは兎に角經濟學は因果の概念に代へて相関的依存關係なる概念を採らねばならぬ。

(註) Sensini, Teoria della rendita, passm.

此相関的依存關係のみしか存在しない以上、經濟現象と之を圍繞する現象とを離して考へることは不可能である。諸要因中の一つが變化すれば他の變化が起る、これが經濟均衡論が教ふる所のものである。余は今經濟組織と云つたが、それは現實に於て如何なる現れ方をしてゐるか。ワルラスは今より五十年前に於て經濟均衡の方程式を立てたが、如何なる程度に於て一國の經濟、英佛獨と云ふが如き國々經濟なり、一大陸の經濟なり、諸大陸の經濟なりが、欲せらるゝ條件を備へたシス

テムを形成するか否かを研究した人は未だにない。經濟的均衡理論の適用の爲めに地理により又は商品により階級付けられた *hierarchie* 均衡組織を考ふべきか、總體のシステム(小麥、石炭等の世界市場)を考ふべきか、局限せられたシステム(一大陸、又は一國內部の商品市場、資本市場の如き)を考ふべきか、又は頗る局限せられたるシステム(勞働市場の如き)を考ふべきか、我らはそれを知らない。吾人は此らのシステムを結合する相關的依存關係が如何なるものであるかを知らぬ。恐らくは此らの關係のうちに因果關係と同様な一義的なものがあるかも知れぬ。だが我々はそれを知らない。パレトの經濟學概論も之を教へてくれぬ。これを教へてくれるであらうものは、ワルラスの理論と結び付けられた事實の觀察である。但し此經濟均衡の解剖學のみならず、其生理學があらねばならぬ。即ち諸要素のうちの一要素の變化がシステムに及ぼす(寧ろシステムの *hierarchie* に及ぼす、蓋しシステムの *hierarchie*こそ眞にある所のものであるから)影響如何、一時的影響なるか、持續的なるか、他より重要な影響なるか否か。此らの問題は將來の經濟學が其指導原理なる均衡の概念を具體的事實に應用して答ふべき問題なのである。

右に述べし所に依りて、吾らは將來の經濟學が採る所の目的(科學的原理)を知り、均衡の原理によりて廣汎なる研究範圍を定めた。今は此研究をよりよく進行せしむる爲に従ふべき他の原理を

述べて見たい。

## 二

それには我らの視野を擴張し、批評を純理經濟學の他にまで及ぼすが便利である。何となれば、それはメンガー及びワルラスの經濟學の基礎の上に將來建設せらるべき文學的經濟學に新原理を與へるであらうから。

そも／＼科學上の理論は具體的實在から引き出さるゝのである。所で經濟的事實を觀察すると、我らは常に變らぬ奇怪なる現象を認めざるを得ない。而してかくも常住的な現象が今に至るまで經濟學者の注意を引かなかつたのは甚だ不思議である。それは經濟學者及び實際家が用うる言葉は誤れる意味をもつてゐると云ふ現象である。云ひ換ふればそれは、經濟的事實と經濟術語の意味とは全く異つてゐると云ふ事實である。殊に此誤は貨幣問題に就て著しく、現在の貨幣の職分からは是認され難い言葉が重要視せられてゐるのである。其證據には新聞にも雑誌にも書物にも到る所に *Versements, dépôts* とか *Argent liquide* とか云ふ言葉が盛に用ひられてゐるが、總て此らの言葉は不正確である。今余は此らの言葉の誤を指摘し、且つ此誤謬を退けて新しい原理を見出したいと

思ふ。

例へば賠償問題を見る。それを論ずる人々は“*sommes dues par l'Allemagne*”とか、“*versements effectués à tel compte*”とか云ふ言葉を絶えず使用してゐる。フランソア一世の身代金が支拂はれたときは、貨幣が實際に支拂はれたのである。現在の經濟組織は當時の經濟組織とは全然違つてゐるのであるが、我らは尙同一の言葉を用ゐてゐる。一八七一年に於て既に五億法の賠償金は所謂「貨幣」を用ひずして支拂はれたのである。世人が熟知してゐるやうに、此賠償金は歐洲各金融市場宛の手形で支拂はれたのであつた。今日の經濟組織は一層進歩してゐるから、獨逸が佛蘭西に賠償金を支拂ふにも、倫敦又は紐育宛の小切手を以てする。それで佛蘭西は支拂を受けた“*encaisse les fonds dus*”と云ふ。然しもし賠償問題を決濟するに、只小切手に署名して足り、それだけで世界の大問題が解決し得らるゝとしたら、獨逸は遙か以前に此方法を實行してゐたに相違ない。だが此場合に支拂ふとは貨幣の問題ではない。實は獨逸は商品を以てしか支拂ひ得ないのであり、従て賠償金の支拂は經濟的均衡を著しく變化せぬ譯には行かない。故に(一)我らの言ひ表し方は誤であり、(二)貨幣と云ふ虚構を取り除いて初めて我らは眞の問題を見出すことが出来る。小切手の署名が經濟的實在でなくして、ルール地方より Briey への石炭の大輸送、ハンブルグ又はブレーメンより



英國への商品の輸送こそ賠償の實在なものはあるまいか。

他の例を國家の財政にとつて見る。財政問題に就て、我らは通常貨幣、<sup>カネ</sup>金 Monnaie, argent なる語を用ゐる。又國庫の必要 Besoins など、云ひ、又「金<sup>カネ</sup>がどん／＼國庫に流れ込む」とか「次で債權者の手に移る」など、云ふ。我官吏に Mouvement général des fonds を掌る Directeur du mouvement général des fonds と云ふのがある。敢て云ふまでもなく此官吏は何物をも動かす譯ではない。故に我々が用うる言葉は無稽である。又國家は租税を收む percevoir など、云ひ、經費を支出する effectuer など、云ふ。だが此場合に何が經濟的實在であらうか。納税者が小切手を署名することであるか、證券の一般的移轉を記録することであるか、國家は其債權者に振替勘定をなすことなのであるか。それとも納税者が新しい衣服なり自動車を買ふを廢する事實なのであるか、國家の債權者が國家の爲に兵舎を作り、軍艦を作り、橋を架くる事なのであるか。經濟的實在は其何れなのであるか。

尙一つの例を擧ぐればエミール・ゾラが其小説 Argent に書いたような銀行及び取引所の領域であつて、そこには言葉と實在との乖離の甚だしいものがある。我々は「昨日倫敦ではコールの利率が上つた、然るに紐育では Argent liquide が豊富である、伯林では月末の moyens de paiement の

引締りて困つてゐる。Crédit Lyonnais は其預金の一部を Reports にした……」など云ふ。それらは經濟的實在に非ずして帳簿上の遊戲ではなからうか。余はそれらを經濟的實在だとは信じられない。余は經濟學者、實際家に向つて「此らの語は何を意味するのであるか」の疑問を繰り返さざるを得ない。(右の例の三個中、前一例に對しては余は此らの問題に對する余の解決を略示してゐる積りであるが、第三例に對しては次第に其説明を與へよう。)

それは兎に角、事實とそれを表すに用ひらるゝイデオムの間にはギャップがある。人間は小切手や、信用や、振替や、爲替手形や、割引て生きてゐる譯ではない。故に現今に於て一現象の特質を表すに貨幣又はそれに附隨する他の語を用うるときには、別に眞の經濟的現象が存在する。だが現れた作用は其れに特有な性質をもつてゐるのではなく、經濟的均衡のない時代又は自然經濟か貨幣經濟か何れか一方のみが行はれた時代に、我らの祖先が用ひた言葉に依りて隠されてゐる實在の附帶現象 *epiphénomène* に過ぎない。要するに總ての貨幣現象は唯一の實在である經濟現象に關係してゐる。

こゝに余が云ふ所のものは甚だ奇怪に見えるかも知れない。然し我らの知識が妨げらるゝ言葉、*イコベン*の所謂偶像を暫らく追ひ拂はんとする人は余の此態度に賛意してくれるであらう。

或ひは反對する人があるかも知れぬ。「汝は貨幣が其職分を盡してゐない僅かな、偶然的例を擧げて我が田に水を引ける者である。だが汝は貨幣が充分に其職分を盡してゐる多くの場合を忘れてゐる。汝の提言は汝が考へるような普遍的性質を帯びてゐない。小切手、振替は幾何かの補充的推論を加ふれば、普通の場合と同一になるであらう」と。然しかゝる反對論をなす者に對しては、余は眞理は全く反對であるとの證明を與へる。即ち先づ貨幣經濟の場合には余の提言は眞であらうし、小切手及び振替の場合は一般の場合が、之によりて眞理を見出し得べく、且つ貨幣の場合は小切手の場合に歸し得るが、小切手の場合を貨幣の場合に歸し得ないと。英國の流通の組織を見るに、既に而して益々小切手で一般に用ひられ、金銀の盡す職分は次第に減じてゐるし、紙幣のそれは第二次的になつてゐる。紙幣及び金銀貨幣の無くなるのを想像し得るほどである。そこで余の提言に反對する者のチレームが起る筈である——英國の流通（それと共に全經濟組織）は佛、伊、奥のそれと異なるか、又は異らざるべきかと。余の知れる限り如何なる經濟學者も此らの間に根本的相異なるを説いてゐない。相異は只流通の形式のみに存し、其性質、其經濟的本質、基礎に關しない。だがもし本質的相異がないとすると、小切手及び振替による流通の性質に就ての余の説は貨幣及び紙幣流通に通ずることとなる。そこで余は新なるフォルミールに達する。曰く流通は經濟的實

在の附帶現象に過ぎない。人間は小切手や信用を食ふ者でもなく、又銀行券で夢みるわけでもなし、貨幣で車がまはるわけでもない。そこで余は將來の理論經濟學の第三の原理即ち非貨幣の原理 *principe a-monnaire* を得る。

將來の理論經濟學は或貨幣現象即ち附帶現象に如何なる具體的現象が隠れてゐるかを探究せねばならぬ。結局分析を押しつむれば、貨幣を導き入れてなす説明を輕ぜねばならぬ。かゝる説明は口上での、懶惰な、そして實在に妥當せぬ理論であり、實在を理解せしめ得ない理論である。だが經的事實に貨幣流通が覆へる覆面を取除くは容易なことではない。

數學派經濟學も塊太利學派も此非貨幣の原理を考へてゐない。但し二學派の間には相異がある。塊太利學派は古典派と等しく生産、流通、分配、消費の區別を絶對的には排斥しない。然るにローザンヌ學派は、此らは分離してない同一現象の諸相に過ぎないことを力強く主張する。ローザンヌ學派の此主張は余の非貨幣の原理と根本的に矛盾するものではない。もしローザンヌ學派が數學的演繹にのみ没頭することなく、ワルラスに負へる均衡の方程式を具體的實在に適用したら、必ずや余と同じく「貨幣現象はそれ自體としては何らの意味をもたぬ。流通の現象は單に附帶現象に過ぎぬ」と云つたであらう。

余の前稿「塊太利學派の新傾向」を読まれた讀者は此點に就てのシュンペーターの思想は余の思想と全く異つてゐるのを思ひ起さるゝであらう。シュンペーターの思想は云はゞ余の思想の正反對である。余は氏の説は誤であると信ずる。然し余の思想は氏の思想なかりせば生れ出てなかつたであらう。シュンペーターは途中で止まつてしまつたのであり、外觀を實在と取り違ひたのであり、非貨幣の原理を考へ得なかつた爲に、經濟的實在の根本にまで進んで行かなかつたのである。流通の事實は附帶現象に過ぎない。

だがこれを證明するためには、尙純理經濟學の批評を續けねばならぬ。(未完)